

平成 21 年 5 月 24 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18720125
 研究課題名（和文） 狂言資料を中心に近代語の萌芽や体系化成立を追究する研究
 研究課題名（英文） The development of grammatical systems in pre-modern Japanese, such as “*yari-morai*” constructions and demonstrative constructions, using mainly *kyoogen* scripts .
 研究代表者
 荻野 千砂子 (OGINO CHISAKO)
 中村学園大学短期大学部・幼児保育学科・講師
 研究者番号：40331897

研究成果の概要：

近代語授受動詞に視点が生じた過程を明らかにした。近代語のヤルは「私が～にやる」、クレルは「～が私にくれる」、モラウは「私が～にもらう」のように、一人称から見た授受表現である。三語は「私」を中心とした一人称寄りの視点を持つ。この理由を、室町時代中期からテ形＋補助動詞の形式が発達した結果であると考えた。テクレで依頼、テヤロウで意志、テモライタイで願望の表現が発達した結果、主語や与格との関係に人称制約が生じ、本動詞に視点が生じたと結論づけた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	500,000	0	500,000
2007 年度	500,000	0	500,000
2008 年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,300,000	90,000	1,390,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学 日本語学

キーワード：日本語史、文法

1. 研究開始当初の背景

(1) 中世末から近世期の口語を研究する一つとして狂言資料が用いられている。昭和になって門外不出の家元狂言が公開されてからは、狂言資料といえば素性が明らかな家元台本を用いることが研究の主流となった。一方、1660年から1730年にかけて出版された「版本狂言記」は、市井に流布していた狂言資料で価値が劣ると見なされることになった。しかし、中世期から近世期の日本語の変遷を考察する際に、「版本狂言記」を主軸に据えることで、近代語の成立に関して新たな見解が示されるのではないかと考えた。というの

も、「版本狂言記」には家元狂言台本には見られない新しい待遇表現や語彙が散見しているからである。そこで、「版本狂言記」を用いれば、不明な点が多い指示詞や授受動詞の発達に関して新しい知見が提示できるのではないかと考えた。これは、指示詞や授受動詞の文法体系化を再考しようとする試みである。指示詞は中世末にコソアドの体系を作り、授受動詞はヤル・クレル・モラウの体系を作る。しかし、どのようにして体系が成されたかについては、明らかでないことが多い。その一端を解き明かすことは、近代日本語の変遷を追究する重要なテーマではないかと考えた。

(2) 「版本狂言記」の資料的価値についての再評価を続ける。家元狂言資料と比較することで、近世初期の口語の実情が一層明確になると考える。これまでも「版本狂言記」の資料的価値に関して調査し発表してきたが、まだ十分ではない。

家元狂言資料に劣らない貴重な狂言資料として十分使用価値のあることを証明していく必要がある。

(3) クダサル の調査において、中世末の古文書に「～てくださる」(動詞のテ形+補助動詞)の用例を発見した。これは近代語用法の萌芽と言える例であり、中世期の軍記物・抄物資料・御伽草子・仮名草子にもみられない用例である。このことにより、古文書史料を積極的に活用すべきでないかと考えた。今後の研究では古文書の語彙も調査対象とする。

(4) 指示詞コソアドの体系化について、研究を進める。特にド系の指示詞は、コソアの指示詞より遅れて発達しているようであり、ド系指示詞がコソアド体系に組み入れられる過程を調査する。また、中世末にソ系指示詞が直示用法(現場指示)を持つと従来の研究で言われているが、ソ系指示詞がどのような過程で現場指示の用法を獲得したのかも調査する。

2. 研究の目的

(1) 狂言資料には授受動詞のヤル・クレル・モラウの三語が現れ、体系化の萌芽がみられるのだが、その中でも「版本狂言記」には～テヤル・～テクレル・～テモラウのテ形+補助動詞の形式が多く見られる。これらの用例を分析することで、授受動詞の発達に関して、家元狂言よりも詳細な研究が可能ではないかと考える。授受動詞が体系化していく、通史的な変遷を明らかにする。

(2) 敬語の授受動詞クダサルが発達したのは中世末である。では、クダサルが発達する前はどのような状況であったのか。敬語授受動詞は古代語から近代語へとどのような体系的な変化を遂げたのかを追究する。

(3) 指示詞のソレが直示用法(現場指示)を持ったのは中世末であるとされる。では、古代語の指示詞ソレの本質はどのようなものであり、その古代語が近代語ではどのような性質を持ったのか、ソ系指示詞の性質を見直すことを試みる。

3. 研究の方法

(1) 古代語の資料を調べ、古代語の本動詞ヤル・クレル・モラウがどのような意味を持っていたかを明らかにする。古代語の本動詞の意味と、テヤル・テクレル・テモラウが現れる時期の本動詞の意味とを比較する。その上でテ形+補助動詞がどのような役目を担っていたかを検証する。狂言資料だけでなく、近世初期のキリシタン資料や喃本での授受動詞にも着目し研究を進める。

(2) 敬語の授受動詞はクダサルが発達する前、タマワルが最高敬語であった。そこで、まず、タマワルの発達状況を調査し古代語の授受動詞体系について考察する。古代語資料を見ていくと、タマワルはクダサル同様に、平安時代の古文書に早くに用例が見られることが分かっている。そのため、古文書史料に関しての調査も必要である。調査は東京大学史料編纂所等で行う。

(3) 指示詞は、琉球方言の指示詞との比較を試みる。先行研究では琉球方言の中称ウ系指示詞が現代語のソ系指示詞と異なっているようである。そこで、比較研究ができる対象かどうかを確かめるために、琉球方言指示詞に関して調査する。その上で、琉球方言のウ系指示詞が古代語のソ系指示詞の用法と共通するものがないか調査を行う。

4. 研究成果

(1) 近代語授受動詞の体系化成立に関しては、まずクダサルについて明らかにした。本動詞クダサルが現代語に見られる「話し手の視点」を獲得した契機は、テ形+補助動詞にある可能性について述べた。テクダサルが、依頼表現「私に～シテクダサイ」形式で多用されたため、二格に「私」という一人称を取りやすくなり、この人称制約が本動詞に影響を及ぼして「話し手視点」(一人称視点)を作ったのではないかという論を展開した。このように補助動詞に独自の役割があるという考えは、通常の文法化の方向とは逆行する考えであるが、日本語の本動詞と補助動詞との関係を考える上で見過ごしてはならない事実である。

(2) 近代語のヤル・クレル・モラウの三語体系が確立する過程を明らかにした。古代語には近代語のような話し手視点(一人称視点)がある授受動詞は存在しない。本動詞ヤルは「自分より遠方に送る」、クレルは「物の授受全般に用い、ヤルの意でもクレルの意でも用いる」、モラウは「自分が相手に乞い求める」というように、個々の意味を持つ独立した動詞であった。その中で、室町時代中期あたりからクレルがテ形+補助動詞の形式を発達させる。

テクレルの用法を見ると、意志と依頼の用法に偏っていることが分かった。室町中期から江戸前期にかけての用例数とテクレルの偏りを示したのが(表1)である。

(表1) クレルとテクレル

	太平記	義経記	史記	蒙求	毛詩	天理	虎明	古本	忠政	版本狂言記			
										正	外	続	拾
テクレル	5	3	5	12	18	46	120	36	14	19	14	68	31
意志+依頼	5	3	4	12	17	40	102	33	12	16	13	66	31
意志+依頼%	100	100	80.0	100	94.4	87.0	85.0	91.7	85.7	84.2	92.9	97.1	100
意	テクレウ ^{※1}	2	2	1	2	9	23	10	2	1	4	29	17
	テクレマイ ^{※2}			1	1								1
意志%		66.7	60.0	8.3	16.7	19.6	19.2	27.8	14.3	5.3	28.6	44.1	54.8
依	テクレヨ ^{※3}	5	1	1	10	9	31	78	23	10	15	9	35
	テクレナ ^{※4}				1	5		1					1
依頼%	100	33.3	20.0	91.7	77.8	67.4	65.8	63.9	71.4	78.9	64.3	52.9	45.2

- ※1 「テクレウ」は「肯定の意志」を表し、マスが下接した「〜てくれましよう」を含む。
- ※2 「テクレマイ」は「否定の意志」を表す。
- ※3 「テクレヨ」は「肯定の依頼」を表し、「〜てくれ(よ・い・φ)」やサシメやサシマセが下接した「てくれさしめ・さしませ」や相手への疑問形「てくりようか」「〜てくれまいか」を含む。「てくれようか」は『正篇』に2例、「〜てくれまいか」は『虎明』に3例見られる。
- ※4 「テクレルナ」は「否定の依頼(禁止)」を表し、「〜くるな」の他、「な〜てくるそ」やサシマスナが下接した「〜てくれさしますな」を含む。

古代語のクレルはヤルの意味も担っていたので、「〜テクレウ」で、「〜してやろう」と話し手の意志を表すこともできたし、「〜シテクレイ」と話し手が先方へ願い出るときの依頼を表すこともできた。現代語で「目に物見せてくれるわ」という言い方ができるのは、古代語のクレルの意味が残存しているためと言える。この時期に、テ形+補助動詞形式が発達したのは、話し手のモダリティと明示する必要があったためではないかと考えた。室町末期になると、テクレルは依頼用法が多くなる。「私に〜してくれい」という表現が多くなり、二格に一人称が多く来るようになり、主格には一人称以外がくることになる。こうして、二格に一人称が固定化した可能性を論じた。

テヤルに関しては、ヤルに「送る」という実質的な意味が薄れた時期を室町末期と判断した。テヤロウが発達するのは、室町末期から江戸初期である(表2)。テヤルはテヤロウという話し手の意志を表すことになり、テクレウで意志を表していた用法が減少した。結果、クレルとヤルでの役

割分担が生じ、ヤルが授受動詞の意味を持ちえたのではないかと考えた。

また、その後願望のテモライタイの表現形式が発達する(表3)。その結果、ヤル・クレル・モラウの主語や与格との関係に人称制約が生じ、一人称の視点が生じたのではないかと結論づけた。

(表2) テヤルの用法

	天草平家	天草イソホ	天理	虎明	古本	忠政	版本狂言記				近松
							正	外	続	拾	
テヤル	0	1	29	43	23	12	5	18	59	31	27
意志※	0	0	23	37	18	9	5	17	52	30	20
意志%	0	0	79.3	86.0	78.3	75.0	100	94.4	88.1	96.8	74.1

※ 意志とは、「〜てやろう」の他「〜てやろ」となる短呼形(特に拾遺に多い)や「〜てやりましょ(う)」となるマス下接の例や「〜てやるぞ」で意志を表すものも含んでいる。

(表3) テモラウの用法

	天理	虎明	古本	忠政	版本狂言記				近松	虎寛
					正	外	続	拾		
テモラウ	5	17	10	0	2	6	3	10	19	49
願望	3	14	6	0	2	6	3	10	13※	30
願望%	60.0	82.4	60.0	0	100	100	100	100	68.4	61.2

※ 打ち消し意志〜モラウマイ1例を含む

テクレ、テヤロウ、テモライタイの三語が揃って見られるのが近世前期の狂言資料である。本動詞の一部の意味を特化させたのがテ形+補助動詞の用法である。テ形+補助動詞が急速に発達し、機能語としての働きが強まると同時に、格と人称とが関連を持つようになり、それが、本動詞にも影響を及ぼし、本動詞にも話し手寄りの視点が生じたのではないかと論じた。実質語である本動詞だけでなく、今までは機能語として役割しか注目されていなかった補助動詞にも独自の機能働きがあることを指摘した。

(3) 古代語タマワルの用例を見ると、平安時代は「(受け手)が〜をたまわる」の用例が多く、「〜をいただいた」と解釈できる謙譲用法が多い。中世になると謙譲用法だけでなく、尊敬用法も見られると従来言われていた。しかし、古文書では鎌倉時代の用例に尊敬用法があることが調査から明らかになった。さらに時代を遡り、平安時代の古記録に尊敬の萌芽が見られることも最近分

かってきたため、現在研究中である。また、中世期はタマワルが最高敬語であり、近世に入ってクダサルに交替したのであるが、このタマワルは方言として、鹿児島や、東京の八丈島等に残っていることが指摘されている。沖縄八重山地方で指示詞を調査しているとき、敬語タボールンがでてきた。中世のタマワルの性質がタボールンに残っているのではないかと考え、調査中である。

(4) 中世末の指示詞において、中称のソ系指示詞発達の手がかりになるのではないかと琉球の指示詞を調査した。

しかし、琉球方言の指示詞に関して、これまでの研究結果では十分に調査されていないことが明らかになってきた。琉球方言でも指示詞は、クリ(これ)、ウリ(それ)、カリ・アリ(あれ)の三語体系を持ち、三語体系という点では日本語共通語と同じなのであるが、日本語共通語の指示詞文法とは全く異なることがわかってきた。

例えば、琉球方言指示詞は人称と連動しないことがわかってきた。相手領域は共通語ではソ系指示詞で指せるが、八重山方言では指示詞を用いることができない。電話で「そっちの天気どう？」と聞くときは、「ソッチ」という指示詞が使えない。「あなたがいるところの天気はどう？」と指示詞を用いないで聞くことになる。また、相手の目の前に自分の湯飲みが有る場合、共通語では「それ、取って」と「ソレ」で自分の湯飲みをさすことになるが、相手も自分も湯飲みが自分であることを認識している場合、相手に対して、「クリ、トリミリー(*これ、とってみて)」と、相手領域であるにも関わらず、ク系(コ系)を用いることができる。

ウ系とク系の相違は、ウ系は漠然とした場合の指示、ク系は特定する場合の指示と言えそうではある。しかし、まだ不明な点も多い。早急に琉球方言指示詞の記述を正確に行う必要性が出てきた。

とはいえ、漠然としたことを表すウ系指示詞の特徴は、平安時代のソ系指示詞に共通する性質でもある。古代語指示詞と琉球方言の指示詞で重なる用法があるのか、今後も追究する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 荻野千砂子「江戸時代前期の「いただく」」『東アジア日本語教育・日本文化』第十二輯 P83-p92 2009 査読有

- ② 荻野千砂子「琉球八重山方言の指示詞について」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』第41巻 P17-p24 2009 査読有

- ③ 荻野千砂子「近世前期のテヤルー現代語のベネファクティブとの比較」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』第40号 11頁-17頁 2008 査読有

- ④ 荻野千砂子「授受動詞の視点の成立」『日本語の研究』(『国語学』通巻230号)第3巻3号 1頁-16頁 2007 査読有

[学会発表] (計9件)

- ① 荻野千砂子「クダサルの古代語授受動詞の性質について」2009年3月30日 第225回筑紫日本語研究会 於：久留米大学

- ② 荻野千砂子「「もらう」と「いただく」」2008年10月26日 東アジア日本語教育・日本文化研究学会 2008年度 国際学術大会 於：日本大学

- ③ 荻野千砂子「古代語授受動詞の体系に関して」2008年8月7日 第222回筑紫日本語研究会 於：九州国立大学九重共同研修所

- ④ 荻野千砂子「中世語「給はる」と琉球八重山地方のタボールンについて」2008年1月5日 第25回九州方言研究会 於：熊本・熊本大学

- ⑤ 荻野千砂子「『琉球館訳語』の琉球語の音註漢字の読み―「南京官話」の影響」2007年10月27日 東アジア日本語教育・日本文化研究学会 2007年度 国際学術大会 於：中国北京・北京外国語大学

- ⑥ 荻野千砂子「沖縄県石垣市の指示詞」2007年10月20日 指示詞研究会・土曜ことばの会 於：大阪・大阪大学

- ⑦ 荻野千砂子「琉球石垣方言のトールン・タボールンについて」2007年8月10日 第214回筑紫日本語研究会 於：九州国立大学九重共同研修所

- ⑧ 荻野千砂子「狂言資料を中心にみた授受動詞クレル・ヤル・モラウの成立」2006年11月10日 第239回近代語研究会秋季発表大会(全国大会) 於：岡山・岡山大学

- ⑨ 荻野千砂子「「てくれる」の萌芽と本動詞「くれる」との関係」2006年8月11日(第209回筑紫国語学談話会) 現：筑紫日本語研究会 於：九州国立大学九重共同研修所

〔図書〕（計1件）

①荻野千砂子「クダサルの人称制約の成立に関して」『筑紫語学論叢Ⅱ 日本語史と方言』（共著）p256-p273（総603頁）風間書房2006

6. 研究組織

(1) 研究代表者

荻野 千砂子 (OGINO CHISAKO)

中村学園大学短期大学部・幼児保育学科・講師

研究者番号：40331897